

町の子ども直筆 社協だより題字

美幌「親しみやすい」と好評

【美幌】町社会福祉協議会（森暉夫会長）の通信誌「びほろ社協だより」の町内の子どもによる手書きの題字が、話題を集めている。「活字の題字に比べたら整っていないが、手書きの温かみが親しみやすい」（町社協）と昨年度から始めた試みだ。題字は毎号変え、これまでに7号出した。（青山秀行）



子どもたちの手書きの題字が話題を集める「びほろ社協だより」

「社協だより」は、町社協が編集に当たっている。協の活動予定や現在行っている福祉サービスの内容などを紹介するため、1973年から年数回発行。今年6月号で通算212号となる。社協内の編集委員会に所属する役員4人が毎号の内容を決め、事務局員2人が「藤田浩孝事務局長」が編集に当たっている。通常の活字の題字だった従来の社協だよりは、「催しの告知記事を載せているのに『この催しはいつなのか』などの問い合わせが多くなる。正直言ってあまり読まれていないなど感じている」（藤田浩孝事務局長）。

毎号更新 若い保護者からメールも

そこで親しまれる誌面作りの一環として、昨年4月号で、町職員の子どもに「びほろ しゃきようだより」と書いてもらい、その文字を題字にした。

効果は上々。1回載せると、高齢者ら従来の読者層以外の、特に幼い子どもがいる若い保護者からメールで手書き文字の写真が届くようになった。題字と合わせて子どもたちの写真も載せるため、最近は普段着の姿でなく、きれいに着飾った子どもたちの写真も来るという。

同社協は題字の変更に加え、こまめな情報発信を心がけて発行間隔も短くした。2年前は年4回の発行だったが、昨年度は年5回、本年度は年7回に。代わりに1号当たりのページ数を減らしたが、題字を載せる回数は多くなった。

藤田事務局長は「読みにくい字でも『何だこれ?』と思って、手にとってもらえれば本望。今後は子どもたちの夢を一言書いてもらうコーナーもつくるなどして、飽きられない工夫をしたい」と話している。